

2025年・令和7年の学び合いが始まりました。

2025年・令和7年1月7日（火）に冬休み明け集会を行い、新しい年の学び合いが始まりました。昨年末の本校では、インフルエンザによる出席停止が多く、年明けの登校は、どうなることかと心配していましたがインフルエンザによる出席停止も少なく、その他の欠席も少なかったです。冬休み明け集会は、感染症や寒さの対策でオンラインで行いました。



校長からの話では、冬休み中に横島小学校の全員の命が守られ無事に新年を迎えられたことと、大きなけがをした人もいなかったことが一番うれしかったと話しました。

そして、冬休みに校長から子どもたちに出した宿題の「家族を大切にしましょう」と「家族で自分ができることをやりましょう」についてどうでしたかとたずねました。

また、「一年の計は元旦にあり」について、それぞれどうでしたかと話しました。

私（校長）は、今年も「笑顔の登校 感謝の下校」ができる学校をめざしてがんばることを決めましたと話しました。そして、「人が喜ぶとうれしかでしようが」と教えられたことから、人が喜ぶことをしていこうと決めたと話しました。ご家庭での子どもたちはどうだったでしょうか。

翌日、何人かの子どもたちが私（校長）に「家族を大切にしましょう」と「家族で自分ができることをやりましょう」について自分がしたことを話してくれました。その中で、弟と一緒に家の農業の仕事の手伝いをたくさんがんばったことを目を輝かせて話してくれました。その目の輝きと笑顔に、私は、身体が温くなりました。とてもうれしかったです。その子どもたちは、家族だけでなく、私も喜ぶことをしてくれました。



左の写真は、昨年10月に学校ボランティアの方々が、横島小学校の正門から児童玄関に向かう花壇に苗を植えて育てていただいた葉牡丹が、厳寒の中でもしっかりと育ってきれいな色をつけて登校してくる子どもたちを迎えてくれている写真です。横島小の子どもたちが、心身共に健やかに成長することを保護者や家族、地域の方々が願って、ほんとうにたくさんのボランティア活動をしてくださって

います。それは、対価を求めない、無償の愛だと思います。ボランティアの方々は、自分ができることで子どもたちが喜ぶことをしてくださっています。そんな地域のおとなたちの姿を子どもたちは、見て、聞いて、体験して、心豊かに成長しています。横島小学校の学校経営案には、「町民は、全体としておおらかで、他人のために働くことを意気に感じる気風がある」とずっと記述され続けてあります。「人が喜ぶとうれしかでしようが」まさに地域の教育力が子どもたちを育てていると思った今年のスタートでした。

横島はすごい！！ 3年生野鳥学習

1月15日（水）

毎年3年生は、地元横島町の満田さんが入っておられる日本野鳥の会の方々から指導していただき、横島小学校や横島干拓にやって来る野鳥を観察することを通して、自分たちが暮らしている地域や自然を学習しています。その学習から、郷土愛と自然環境を守る意思を育みます。1月15日（水）、3年生の子どもたちは、まず教室で東京から来校された日本野鳥の会事務局とWWF



（世界100か国で活動されている環境保全団体）の方々からマナヅルについてお話していただきました。越冬のために日本に来るマナヅルの飛来地は、国内に5か所くらいしかなく、横島干拓は、その貴重な場所の1つで、餌付けもせずに来るのはとても珍しいそうです。横島干拓には、マナヅルたちの餌である穀物（お米の落穂）や植物、小魚、カエルなどが豊富にあるそうです。また、マナヅルたちが越冬しやすい環境にあるのだそうです。WWFの方からは、モンゴルの子どもたちが、マナヅルの保護活動を行っていることも話していただきました。その後、子どもたちは、玉名市のバスに乗り込んで六枚戸と熊本牧場近くの干拓地に行って現地を学習しました。六枚戸では、横島干拓の歴史とその素晴らしさを、沼垣先生やまちづくり委員会の方からお話していただき、横島の先祖が成し遂げた偉大な功績を学びました。熊本牧場近くの干拓地では、満田さんたち日本野鳥の会の方々からお話と指導をしていただきながら野鳥観察をしました。マナヅルの群れが飛んできて、子どもたちは歓声を上げながら観察しました。この学習は、子どもたちの豊かな感性と郷土愛、自然環境保護の意思を育んだと思います。



ようこそ倉田さん 1月22日（水）

横島町出身で、くまもと障害者労働センター代表の倉田哲也さんのお話を4時間目に全校児童と職員で聞きました。倉田さんは、私（校長）の約30年来の友だちで、横島小の子どもたちにぜひ会わせたい人でした。念願かなって全校で倉田さんのお話を聞き、交流することができました。倉田さんは、早産で生まれ、へそのおが首に巻き付き、呼吸ができずに脳障害をおこし、手が使

えないために生活の全般を足で行って生きてこられました。1972年から養護学校（現在は、支援学校。）で学び、高等部を卒業後に1985年に養護学校を卒業した3人で熊本市で「誰もが地域で働き地域で生きる活動」をめざして、くまもと障害者労働センターを設立して、1990年から代表として今日まで活躍されています。「労働」で、仕事を通して「自分らしさ」を発揮し、地域社会に貢献し、生活の糧を得るということを活動のテーマとして、障害のあるなしにかかわらず、だれもが人間らしく生きていく社会の実現をめざしておられます。2004年6月には、自費で車を改造して、自動車学校に持ち込み、日本初の足でハンドルを操作する運転で自動車免許を取得されました。その車を運転して、営業活動や講演等の仕事をされています。「障害は、不自由だが、不幸ではない。障害を克服するのではなく、『障害』者差別をなくしたい。」「『どうせ』という言葉に『せっかく』という言葉にかえる」等のたくさんのことを話や行動で教えてくださいました。子どもたちは、とてもとても大事なことを学びました。